
夜を歩く

月野塔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜を歩く

【コード】

N9945H

【作者名】

月野塔

【あらすじ】

「夜」をイメージして言葉を綴っています。読んで下さった方の嬉しい夜、悲しい夜、様々な夜に添えますように。

牢屋

秘密を一つ。

嘘つきは、僕、ではなく、僕の言葉だ。

僕の言葉が、嘘をつく。

君に、ではなく、僕に。

嘘

時は流れてしまったけれど、あの日の空を忘れない。

僕が小鳥を逃した日。

あの子の小鳥を逃がした日。

僕はそつと見ていたけれど小鳥をこの手に乗せたくて、籠の扉を開けてみた。

小鳥はこの手をすり抜けて、夕焼け空に消えて行った。

僕はあわてて扉を閉めて、あの子の家の庭から逃げた。

誰かが戻って来る前に、あの子が戻って来る前に、僕は一人逃げ出した。

僕が魔法使いなら時間を戻してしまえたのに。

あの子の小鳥は、もういない。

「ピースケが消えちゃった……」

あの子は僕のところに来て来た。

小鳥を探しにやって来た。

「探してるけど、どこにもいないの……」

空は闇に染まっていた。

声を殺して泣くあの子。

それを見ているだけの僕。

「ねえピースケを見なかった……？」

「僕知らない」

言ったあとで、目が合った。

あの子の瞳が僕を捉えた。

その眼差しが僕を捕らえた。

夜空と同じ色だった。

僕はあわてて背を向けた。

あの子は静かに帰って行った。

僕は知らない僕は知らない、心の中で呟いてみた。

これから小鳥はどうなるのだろうか。

あの子はどんな気持ちだろう。

僕は知らない僕は知らない、心の底で叫んでいた。

その日の夜は眠れなかった。

怖くて怖くて仕方なかった。

家族の誰にも言えなかった。

そしてふと気が付くと、僕は独りぼっちになっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9945h/>

夜を歩く

2010年10月20日12時36分発行